

シビル メール ニュース

これまでに配信されましたシビルメールニュースは、「日本大学理工学部土木工学科」のホームページ (<http://www.civil.cst.nihon-u.ac.jp>)より『OB向け情報』→『シビルメールニュース』でご覧いただけます。なお、シビルメールニュースをE-mailにて配信ご希望の方または郵送を希望される方は、卒業年次・氏名・勤務先・配信メールアドレスを明記の上、mailnews@civil.cst.nihon-u.ac.jpで申し込み下さい。

発行責任者 土木工学科教授・教室主任 岸井隆幸

付属生のためのオープンカレッジ開催

6月8日(日)に駿河台校舎1号館において、日本大学の付属高等学校から進学を希望する生徒に対する日本大学理工学部主催のオープンカレッジが開催されました。各学科が2～5階の教室にそれぞれブースを設けて学科紹介を行いました。2・3階ロビーでは付属校出身の大学院生による質問コーナーを設置して、大学生活に不安がある高校生にアドバイスすると同時に楽しい大学生活の話をしていました。6階CSTホールでは、学部長の歓迎の挨拶や、オリエンテーションによる理工学部の説明とオープンカレッジのガイダンスが行われ、その後もシンポジウムや入試説明会が行われました。土木のブースには、15校、延べ190名ほどの付属校生が訪れました。また、ブース内部には展示パネルやミニ実験コーナーを設置して、土木工学科の内容紹介を行いました。ミニ実験コーナーでは「水理」「材料」「地盤」「水質」の4分野で教員と大学院生がそれぞれの説明を行い、高校生は熱心に説明を聞いていました。

ミニ講義では岸井隆幸教授が「都市デザインー都市計画は土木の世界ー」と題し安田陽一教授が「河川環境ー地球の医者としての役割ー」と題しそれぞれ30分ずつ講演し、約40名の高校生が真剣に講義を聞いていました。



岸井先生によるミニ講義の様子



実験コーナーにて生徒たちに説明をする
教員と大学院生達

理工スポーツ大会開催

5月29日（木）に船橋校舎において、理工・短大合同スポーツ大会が開催されました。当日は残念ながら雨でトラック競技、フットサル、テニスといった野外競技8種目は行われませんでした。バレーボール、バスケットボール、卓球、バドミントン、アームレスリングの室内競技5種目が行われました。開会式は午前9:30から行われ、学部長挨拶、土木工学科の学生による選手宣誓、学生担当である本学科松島眸教授による競技上の注意、ならびに校歌斉唱があり、その後、約6時間に渡ってそれぞれの競技が実施されました。



土木工学科学生による選手宣誓



バスケットボール試合会場の様子



卓球試合会場の様子

野外種目に参加する予定だった学生も飛び入りで室内種目に参加し白熱した試合を見せていました。

土木工学科の学生は飛び入りを含めると5種目全てに参加し、会場を大いに盛り上げていました。また、審判員としても土木工学科の学生が6人参加し、大会の運営に貢献していました。

学術フロンティア推進事業成果報告会開催

6月7日（土）に駿河台校舎9号館901教室にて、文部科学省選定学術フロンティア推進事業平成19年度「環境・防災都市に関する研究」成果報告会が開催されました。今回行われた報告会で、塩尻弘雄教授は「地盤及び既存構造物の地震時安全評価診断に関する研究」、野村卓史教授は「市街地の風環境解析法」、鈴木順一准教授は「防災都市構築における地域耐震性評価に関する研究」、羽柴秀樹准教授は「都市の立体構造と被覆の把握」、仲村成貴助手は「地震時の地盤振動評価に関する研究」と題しそれぞれ発表を行いました。会場には、学生の姿も多く見られ、真剣に発表を聞いていました。

駿博会創立 25 周年記念講演会開催

5月31日(土)に駿河台校舎1号館6階CSTホールにて日本大学理工学部駿博会創立25周年記念講演会「理工の未来」が開催されました。今回は駿博会創立25周年を記念して「理工学の未来」と題して、理工学部にも所属する若手の研究者3名による記念講演会を行いました。

この中で、土木工学科の高橋正行専任講師が「流水デザインー空気混入流の解明とその応用ー」という演題で、豊かで潤いのある社会環境づくりを目指しているシビルエンジニアの取り組みについて講演しました。

日大土木 Who's Who

日大土木とともに歩んだ偉人を紹介するコーナーです。今回は御茶ノ水のシンボルである、聖橋を設計された成瀬勝武先生です。



No. 12

氏名：成瀬 勝武

専門分野：橋梁工学

在任期間：1930～1967年

略歴：

明治 29 年	(1896 年)	東京本郷に生まれる
大正 9 年	(1920 年)	東京帝国大学工学部土木工学科卒
大正 12 年	(1923 年)	帝都復興院土木局橋梁課長
昭和 4 年	(1929 年)	復興局橋梁課長
昭和 5 年	(1930 年)	日本大学工学部土木工学科教授
昭和 42 年	(1967 年)	日本大学理工学部土木工学科教授退任
昭和 51 年	(1976 年)	享年 80 歳

成瀬先生は、昭和3年(1928年)、私学として我が国で初めて日本大学工学部(現在の理工学部の前身)に土木工学科が設置された2年後の昭和5年(1930年)、教授として着任されました。当時の専任の教授と教員は、成瀬先生をはじめ数名でした。以後、昭和42年(1967年)に退任し、名誉教授になるまでの37年間、橋梁工学を担当され、数多くの橋梁技術者を輩出しました。

成瀬先生は、東京帝国大学工学部土木工学科卒業後、猪苗代水力発電社の技士として、構造物の設計を担当し、会津磐梯山北側の檜原湖でダム関連の現場工事に従事しました。大正12年(1923年)に関東大震災の復興事業実施組織として設立された帝都復興院(後の復興局)に移り、橋梁技師として活躍されました。また、成瀬先生が27歳のときで、当時の上司(橋梁課長)は、現在も土木学会田中賞で名を残している田中豊先生でした。隅田川の諸橋ほか百数十橋に及ぶ橋梁の設計・積算のまとめを行い、自らも数寄屋橋や聖橋などを設計しました。

成瀬先生が設計された聖橋は、御茶ノ水のシンボルであり、東京の美橋の1つとして人びとに安らぎを与えると同時に、我々土木技術者に勇気と夢を与え、現在も見守り続けています。

参考文献 藤井肇男,「土木人物事典」, (株)アテネ書房, 2004年12月
成瀬輝男,「成瀬勝武」, 土木と200人, 土木学会, 1984年10月

最近の教員活躍状況



安田陽一教授（環境水理研究室）が5月2日（金）にウィーン工科大学熱輸送および流体力学専攻主催の招待特別講演会にて「長方形断面水路に形成される跳水現象の形成に対するレイノルズ数の影響」と題し講演を行いました。土木工学ばかりでなく機械工学、航空宇宙工学、数学、物理学の研究者約30名が聴講しました。

以下、安田陽一教授からの談話を掲載いたします。

「水平水路上で速い流れ（射流）から遅い流れ（常流）へ遷移する際、跳水現象が形成されます。従来矩形断面を対象として、跳水現象は流入する流れの速さを示すフルード数の大きさと流況が分類され Bradley, J. N. and Peterka, A. J. によって势力的に現象解明がなされ、1957年に流況分類が示されてきました。やがて、1959年に示された流況区分図が現在にかけて一般認識されたものとして専門書に掲載されています。研究レベルでも流況区分に異論を唱える研究成果はほとんど提示されていませんでした。その一方で、本学の水理研究室では跳水現象の特性を解明するために系統立てて実験をし、検討を進めました。その結果、跳水現象はフルード数の大きさばかりでなく、アスペクト比（水深と水路幅の縦横比）、流入流れの流速分布の違い（乱流境界層の発達状態）、および粘性の影響を表すレイノルズ数によって異なることを見出し、その研究成果の一部は2001年から2003年にかけて国際論文誌に掲載されました。さらなる研究成果については国際会議等で発表し、国際的に注目されています。招待講演ではその一連の研究成果を発表してきました。特に、跳水現象の形成に対する粘性の影響に着目した研究を発表しました。」



金子雄一郎専任講師、下原祥平助手が、6月6日（金）～8日（日）に北海道大学で開催された「第37回土木計画学研究発表会」及び「新しい土木計画学を考えるシンポジウム」に出席しました。同発表会は土木学会土木計画学研究委員会の主催で毎年春と秋の2回開催されるもので、このうち春大会は、特定のテーマについて集中的に討議する企画セッションが中心となっています。

金子雄一郎専任講師は交通制度論セッションにおいて、「我が国の鉄道事業制度の現状と課題」について、下原祥平助手は都市間旅客交通に固有の調査方法・分析方法の開発セッションにおいて、「幹線旅客純流動データを用いた近距離高速バスの特性分析」について、それぞれ発表を行いました。



野村卓史教授、仲村成貴助手、大澤祐太郎さん（塩尻研究室・大学院2年生）が、6月10日（火）～12日（木）に日本学会で開催された第57回理論応用力学講演会に出席しました。

野村卓史教授はセッション「風応答・風環境の予測・制御」においてセッション・オーガナイザおよび座長を務めるとともに「墓石の転倒による風速評価に関する検討」と題する論文発表を行いました。セッション「構造物の減衰」では、仲村成貴助手が「常時微動記録に基づくSRC造建物の動特性変化」、大澤祐太郎さんが「減衰の同定法」と題する論文発表をそれぞれ行いました。いずれのセッションにおいても活発な意見交換がなされました。

また、小林義和専任講師は実行委員会の一員として本講演会の運営を行いました。